

集団／身体／言語活動

門 部 昌 志

Corps, Langage, Collectivité

Masashi MOMBE

Résumé

Un esthéticien, Masakazu Nakai (1900-1952) est considéré comme un des précurseurs de l'étude sur la communication au Japon. Ces derniers temps, de jeunes chercheurs s'intéressent de nouveau à lui. En relisant les articles qu'il écrivit principalement dans la première moitié des années 1930, nous examinerons ses idées sur le langage et sur la signification (sens des mots, des phrases, des oeuvres d'arts).

Dans son article « La Langue », il a critiqué les idées reçues sur le langage. Pour lui, la langue n'est pas un moyen transparent de communiquer, mais quelque chose qui a un sens esthétique en soi. Il a remarqué les différences entre langue parlée et langue écrite, et celles entre langue écrite et langue imprimée, en analysant les changements de la pensée philosophique : de la dialectique de la Grèce antique à la dialectique hégélienne.

En 1930, dans l'article intitulé « La Direction de l'élargissement de signification et sa tragédie », il discerna l'auditeur intérieur de l'auditeur extérieur. Il décrit le remplissement de signification pour le locuteur et la présentation des phrases ou celle des oeuvres d'arts (la direction de l'élargissement de signification).

Par ailleurs, chose curieuse, il compara le langage au rugby ; le premier composé de la parole et de l'audition, le second consistant en deux équipes antagonistes. Le ballon ovale porté au but est comparé au remplissement de signification. Une passe du ballon perpendiculairement au but, avant qu'il l'atteigne est une comparaison avec l'accroissement de signification chez le récepteur. Certes, sa métaphore est étrange, mais, on pourra y trouver des images intéressantes : le langage comme jeu, la communication comme combat. Par rapport à la métaphore de l'échecs (F. de Saussure), il semble que celle du rugby attache de l'importance au corps.

A cette époque-là, Nakai s'intéressait au concept de la fonction qui avait été présenté par E. Cassirer. Grâce à cette notion, il pouvait introduire et développer ce que l'on appelle aujourd'hui la pensée relationnelle. Il considéra la collectivité comme une organisation relationnelle interdépendante: l'un des exemples est l'équipe de sport, toutefois, en ce qui concerne le rugby, il y a le conflit entre les deux équipes. Nous examinerons la métaphore du rugby qui souligne une relation étroite entre le corps, le langage et l'action, en considérant sa recherche sur la collectivité.

一 はじめに

美学者、中井正一（一九〇〇～一九五二）は、「委員会の論理 — 一つの草稿として —」（以下、「委員会の論理」とする）、あるいは反ファシズム文化運動への関与によって記憶されてきた¹。一九六〇年代、鶴見俊輔がコミュニケーション論の文脈に中井を位置づけて以来（鶴見、一九六二）、彼の論考からコミュニケーション論的要素を抽出する研究が多々なされているが²、メディアに注目した研究も増加している³。

近年の印象的な出来事は、二〇〇〇年に中井に関する論考が日本マス・コミュニケーション学会の学会誌に相次いで掲載されたことである。まず、北田暁大の「《意味》への抗い—中井正一の映画＝メディア論をめぐって」（北田、二〇〇〇）が、次に後藤嘉宏の「中井正一とコミュニケーションの双方向性」が掲載された（後藤嘉宏、二〇〇〇）⁴。偶然ではあるが、同年、中井における関数（機能）概念の受容と応用に関する発表を筆者自身も行なった⁵。これらの論文や報告が示すのは、メディア／コミュニケーション研究における中井への注目である。

ここでは北田論文に注目してみよう。その特徴は、第一に、中井の思想を「直接性＝無媒介の思想」と見做す点であるが、それはボート競技を例として説明される。ある競技を習得するとは、規則や方法を思索的に「理解」することではなく、身体やオールなどの道具、水などの自然との連関性を「コツ」のような身体知の次元で体得することである。「自然（水）との人間（漕ぎ手）のたえざる折衝＝試行錯誤のなかから、『ああ、そうであったのか……』という事後的な反省が間断なく漕ぎ手へと要請される。つまり、理論・思想という『意識の面におけるメディウムの媒介……』を経ることなく、自然との折衝のなかから直接的＝無媒介的に主体に反省を迫る契機が、<オールを漕ぐ>という現実的行動には見出されうるのである。この『無媒介の媒介』ともいべき逆説的媒介を中井は媒体 Mittel とよび体系的思想に代表される Medium と峻別している」（北田、二〇〇四：六七）。ここに見られるのは、体系的思想と直接的＝無媒介な行動との峻別である。それは、中井の映画論を論じるなかで提示された受け手像にも反響している。受け手は「意味解釈に終始する解釈学的主体」ではなく、直接的＝無媒介にメディア「において (in)」その身体を受容空間へと投げ出すような受け手であると規定される。これらの議論は、中井に「<意味>への抗い」を見出す姿勢に通じている。「中井はしばしば、……『抵抗の美学者』として記憶されてきた。しかしわれわれは彼を単にイデオロギー上の抵抗者としてではなく、近代の意味中心主義を拒絶したラディカルな抵抗者＝人間学的唯物論者……としてもとらえなくてはならないだろう。未だわれわれが逃れられない<意味という病>を看破したラディカリストとして」（北田、二〇〇四：七三）。

北田論文では意味中心主義への抵抗者という興味深い中井像が提示されている。ここで、その前提を確認しておこう。第一に、北田は、中井の思想を「直接性＝無媒介 Unmittelbarkeit の思想」と呼んでいるが、これは「ベンヤミンの技術論を念頭に置」いたものである。第二に、「<意味>への抗い」をタイトルとするこの論考において、頻繁に言及されたのは主に中井の映画理論やスポーツ論である。意味を論じた、中井のテキストに対する沈黙は、理論的な理由による戦略的な回避とも考えうる。しかし本稿では、言語や意味に関する中井のテキストを手がかりとして議論を進め、とりわけ言語活動の隠喩としてラグビーが用いられたことに注目する。一九二〇年代後半から三〇年にかけて、中井は言語と意味をどのようなものとして論じたのであろうか。既に拙稿で論じた主題であるが⁶、以下では、まず、中井の言語、言語活動、意味に関するテキストを検討した後、言語活動の隠喩としてのラグビーに言及する。そして同時期に発表されたスポーツ論を補助線としつつ、中井におけるコミュニケーションのイメージを素描することにした。

二 中井正一における言語活動と意味

二・一 言語活動と思惟

まず、二〇年代後半の論考「言語」（一九二七～一九二八年）に注目したい。冒頭には、道具的言語観への批判が散見される。読み取れるのは、言語を単なる伝達器とみなして芸術的意味を否定する見解から距離をおく姿勢である。中井はむしろ次の立場を肯定する。従来、「単なる伝達器」と見なされてきた言語は、「単なる壺であったのではなくして酒でもあった」（中井正一、一九八一〔第一巻〕：二一六）。中井にとって言語は、意味伝達の透明な媒体ではなく、感覚的意味を持つものであった。「概念的あるいは志向的意味」のみならず、「言語の芸術的意味」が語られていた。

その後、「いわれる言葉」より「書かれる言葉」、さらに「印刷せる言葉」にいたる言語媒体の歴史が記述され、古代ギリシアの哲学的問答法からヘーゲル弁証法にいたる哲学的思惟の変容が素描される。中井は、ディアレクティクの移りゆきを、他者に語られる「外なる言葉」より、自己に語る「内なる言葉」への推移として図式化している。このような議論は、言語活動との関連から思惟を考察する問題設定と思われるが、アイディアの源泉の一つは、古代ギリシアに関するブチャーの記述であったようである。「ブチャーによれば、彼らは『合理的思想』としてのロゴスの働きを『合理的言説』としてのロゴスの使用と不可分であると考え、知識の材料の上に形成的に働くところの働きは、二つの人格的な知恵の衝突なくしては、すなわちところに対するところの働きかけ、問いと答えの交換、会話による思想交易なくしては、ほとんどじゅうぶんに腕をふるうことができぬと考えた。／彼らはむしろ声高く考えつつあった。それは論敵と討論するようにそれ自身と討論している。……かくして哲学は常に戯曲的対話のうちにみずから形づくったのである」（中井正一、一九八一〔全集1〕：二一八〔ルビ削除〕）⁷。ブチャーによれば、古代ギリシアの思惟にとって、「会話による思想交易」は重要なものであり、思考それ自体もまた自己との討論であった。古代ギリシアにおける口承文化の重要性を強調する見解とは異なり、プラトン研究者でトロント・コミュニケーション学派とも呼ばれる E.A.ハヴロックは、文字批判にもかかわらず、プラトンと文字文化の関係を強調した（Havelock, 1963）⁸。ハヴロックによる議論の検討は本稿の課題ではないが、着目したいのは、ブチャーの議論に言及した後、中井が言語活動の場に論理や思惟を位置づけ、それらの歴史的変容を考察したことである。この問題設定は、「委員会の論理」冒頭の記述へと発展する。そこでは、永遠の世界を支配するものとしての論理ではなく、文化の推移において論理が果たした役割が強調されていた。「いわれる論理」「書かれる論理」「印刷される論理」という中井独自の用語がもちいられる所以である（中井、一九三六）。

二・二 発言形態と聴取形態

論文「言語」では、実質的には、言語活動と思惟の歴史的考察がなされていた。これに対し、一九二九年の「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」では、言語活動と思惟に関する歴史的考察は、その要点が繰り返されるにとどまり、議論は論理的な次元で展開されている。「ソシュールが言語と言語活動を区別せしこと」への言及を始め、「言語活動」という用語が頻繁に使われるのもこの論考の特徴である。

枢要な問題は、従来、＜判断＞は一様に捉えられてきたが、自らに語りかける場合と他に語りかける場合に応じて異なるというものである。ライナッハの場合、判断は＜確信＞と＜主張＞の二領域に峻別される⁹。まず、＜主張＞には、単純な主張と論争をめざす主張がある。とりわけ、論争は「相手の承認の要求」をもち、「相手の確信にまで連続する」。論争がもつ、他人に対する

「了解の要求」は、「社会的作用」の顕著な特質と述べられる。というのも、自我において確信を主張に転ずることは可能であるが、同意を得ることは不可能だからである。判断を<確信>と<主張>の二領域にわかったライナッハの議論を紹介したのち、中井はさらに<確信>を「二つの方向」に分割する。一方には、発言者が他人に同意を求める際の確信、すなわち「出発点としての確信」があり、他方には「帰着点としての確信」がある。それは他人より同意を要求された主張に対して聴取者が了解する場合の確信を指す。つまり、他者の同意を求める際の確信と了解する場合の確信が指摘されている。換言すれば、発言と聴取の区別によって、中井は<確信>を峻別したことになる¹⁰。

二・三 意味の拡張方向と量的展開

述べたように、一九二九年の「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」では、発言と聴取の区別によって確信が分割されていた。一九三〇年の「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」では、発言と聴取の対比は意味の問題に適用される。命題がもつ意味は、それを発言する場合と聴く場合では異なるのではないか。こうして、意味の質的深化のみならず、意味の量的展開が組上に載せられる。論文タイトルにある「意味の拡張方向」とは、ある命題を他者に語る行為に結びついている。中井は、これをラグビーの比喩を用いて説明する。

『SはPである』の命題が意味の拡張方向を指すとは、それが他の人の関心において同方向への意味充足を予想して手わたすことである。ここに一つの例をとるとするならば、ラグビー球戯において、発言と聴取の両形態を二つの対立するチームと考え、常にゴールを志向する球を意味の志向性とするならば、競技者によってゴールに運ばるる球はすなわち意味の充足作用であり、その方向と直角にパスして他の競技者に球をわたすこと、そして彼をしてさらにゴールに突き進ましむること、そこにすなわち意味の拡張方向における作用がある」(中井、一九八一〔全集1〕:二六六―二六七)。

この一文は、様々な疑問を喚起するであろう。ボールに注目したこの隠喩は単なる実体論にすぎないのではないか、あるいは送り手から受け手へと移転されるものの同一性を誇張しているのではないか等々。しかし、一九三〇年頃、カッシーラーの関数概念を受容した中井は、すでに関係論的思考に親しんでいた。「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」と同時期に発表された論文「機械美の構造」が示すのは、中井が「もの」の中に関係を見いだす発想の持ち主だったということである¹¹。さらに、後に説明するように、意味の拡張という彼の術語が示唆するのは、移転されるものの同一性が常に成立するわけではないという事態である。もっとも、これらの点を差し引いたとしても、この隠喩に対して様々な問題点を指摘しうると考える読者がいるかもしれない。誤解を避けるために本稿の課題を明示するならば、以下で行いたいのは、コミュニケーションの一般的モデルを提示することではない。この隠喩に注目するのは、中井における言語活動と意味の観念、さらにはコミュニケーションないし微視的な相互作用の観念を探る手がかりとしてである。

実際、中井研究やコミュニケーション論の領域で、この隠喩に注目した先行研究がなされてきた。たとえば、佐藤毅は、彼自身が同化論と見なしたミードの議論と対比しつつ、受け手側の異化論を展開する手がかりとして、意味の拡張作用と疎隔に関する議論に注目した(佐藤毅、一九七三)¹²。また、中井における他人の否定性に注目した竹内成明氏は¹³、ラグビーの隠喩によって通俗的言語観を転倒した。「ラグビー競技において二つのチームがぶつかりあってこそ、競

技者一人一人の行為に意味が生じてくる……ゲームがあって一つ一つの動作に意味が生まれ、発言があって一つ一つの記号に意味が生じてくる。私たちはともすれば、そのところを逆転させる」(竹内、一九七七：一四)¹⁴。記号の意味は錯綜した動的状況において生起するが、社会通念において、生成過程は忘却され、意味は所与の実体と見なされる。

足早に先行研究を確認したわけであるが、先の隠喩の解釈を示しておこう。この隠喩の冒頭では、第一に、ラグビーの「二つの対立するチーム」が、発言と聴取に対応している。第二に、先の引用部分の二行目では、競技者によってゴールに運ばれる球が意味の充足作用に譬えられ、他の競技者に球をパスしてゴールに向かわせることが意味の拡張方向における作用に譬えられている。

意味の充足的作用は、自らに語る内なる言葉や思惟の領域の作用である。他方、意味の拡張方向における作用は、外なる言葉や主張において見出される。「SはPである」という命題を他者に「同方向へ意味充足を予想して手わたす」時、その命題は意味の拡張方向を指している。主張は「一つの確信をそれと同一意味をもって他に確信を要求する」方向であり、相手の承認を要求するものである¹⁵。

中井は、芸術を例として、意味の質的深化と量的展開という対比をつけ加える。芸術作品とその作者との関係は、意味の充足的方向におけるものであり、そこには意味の質的深化が見出せる。これに対し、芸術作品を他人に提示する行為は拡張的方向に対応しており、そこには意味の量的展開が生じる。このように、中井は、自我の内面における意味の充足と質的深化、さらに、社会の内面における意味の拡張と量的展開という「芸術的意味の構造」を提示する。

意味の拡張方向はさらに分類されている。「了解能力の可能性、換言すれば意味充足の追求能力の比較において、同等である場合と、差異ある場合と、そのいずれでもありうる場合に分かれる」。これらは、それぞれ、対立的、転換的、統体的と呼ばれる。これらの議論において、コードや意味構造、支配的な社会構造、優先的意味などの観念が前提とされていないことは自明であるにせよ、受け手の了解能力に応じた多様な受容の可能性が示されたことは注目してもよい¹⁶。

意味の拡張と量的展開はディスコミュニケーションの問題に関連しており、中井において、それは他人への疎隔と呼ばれる。他人に対して「みずからは決してさながらに受け取られることはない」のである。ラグビーの隠喩は、一見、送り手が受け手に何かを渡し、それが受け取られるとする移転メタファーのように思われる。しかし、意味の拡張や疎隔の問題は、移転されるものの同一性に疑問を投げかけている。

ここで、中井のコミュニケーション論的側面を整理しておく。第一に、中井が何の意味について論じていたのか、という点である。論文「言語」で論じられたのは、言語における概念的意味、そして芸術的意味ないし感覚的意味であった。この対比は、「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」で発展させられている。一方は、「SはPである」という命題のレベルにおける意味として、他方は絵画、小説、戯曲などを例とした芸術作品の意味として¹⁷。従って、一九二七年から一九三〇年頃の中井は、言語と芸術作品を念頭に置きながら、概念的意味と感覚的意味について論じていたことになる。第二に、中井は発言と聴取の区別を意味論に導入し、意味の拡張や量的展開という論点を導き出した。この問題は、今日受容研究に通じる。また、意味の拡張方向とともに論じられる他人への疎隔はディスコミュニケーションの問題であった。第三に、内なる言葉と外なる言葉というタームが示すのは、個人内のコミュニケーションと個人間のコミュニケーションが論じられたということである。

二・四 発言と聴取の交叉

「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」の冒頭で中井は主張と確信の区別を取り上げていた。しかし、論文の末尾において彼はその区別を脆弱なものにしてしまう。「主張と確信の二つの領域はその解体を要求されはじめる」。その理由は「内なる聴取者」に関わっている。

中井は発言者における聴取者の存在を指摘していた。ある命題について発言する時、他人は判断を留保しながら、肯定でも否定でもない無関心の状態でそれを聴く。だが、そればかりではない。発言者の内なる聴取者もまた、判断中止の無関心な状態で、その発言を聴いているかもしれないのである。従って、「私たちは、私たちの中にもまた、聴取者をもっている」（中井、一九八一〔全集1〕：二六二）。ここでは、発言者と聴取者の二極ではなく、発言者、「自我の内面なる聴取者」と「自我の外面なる聴取者」が想定されている（中井、一九八一〔全集1〕：二六五）。

二・五 「意味の拡張方向」の前提

言語論から始まり、発言と聴取、そして意味の拡張方向に関するテキストを辿ってきた。これらの論考を読む手がかりは、「文学の構成」（一九三〇年）に見いだされる。言語構造に関する地質学的隠喩など、興味深い記述が含まれているが¹⁸、ここでは、意味に関連する論点を確認する。

第一に、このテキストでは、意味の拡張方向と現象学における意味充実（中井は「意味充足」と表記する）の関係が示されている。「現象学」における「意味の充足作用 Erfüllungsakt についてはすでに多くの検討がなされているけれども、それはしかし、単に確信の領域にかぎられている。主張、すなわちそれを一歩進めるならばアジテーションであり、さらに二歩進めるならばプロパガンダであるところの意味の拡張の方向が閉却されている。ライナッハの他に了解されたき要求の心理的要素を抽出することによって、社会の本質的構成はむしろ、この意味の拡張方向の構成領域ではあるまいか」（中井、一九八一〔全集3〕：二五九）。意味の拡張という用語は、現象学における意味充実の概念と異なるものとして提起された。意味の拡張は他人とのコミュニケーションや主張に関する言葉として、社会に関わる概念として — 経験や現実の意味についての洞察が見られないとはいえ — 提示されたのである。

第二に、「文学の構成」では、意味の充足方向および拡張方向の対比が、比喩なしに説明されている。「私たちの言語構造は二つの隔離の上に成立する。一つは無限に自分に向かって問わんとする方向における意味の方向と、他は無限に他人に向かって問わんとする方向における意味の方向である。前者は意味の充足としての『もの』の模索であり、……後者は意味の拡張としての『もの』の模索である」（中井、一九八一〔全集3〕：二六〇—二六一）。ここで述べられている意味の充足と拡張の相違を考える前に、現象学における意味充実の概念について述べておこう。

知られるように、フッサールは、『論理学研究』において、意味志向と意味充実化を区別した。前者は、伝統的には概念や思想（直観的に充実されていない思念という意味での）という用語で論じられた問題であり、後者は概念や思想に対応する直観に関連している。例えば、今、ある人物が庭をみており、「一羽の鳥が飛び立つ」という言葉で彼／彼女の知覚を表現した場合、聴き手は、自分で庭を眺めなくとも、この言葉と文全体を理解しうるし、信頼を通して同じ判断をくだしうる。我々は、自分で知覚しなくても、他者の知覚の表現を理解し、思想の形式ないし表現をも理解するのである。この時、対象との関係が直観によって裏付けられない場合、それを空虚なものと呼ぶとすれば、対象が実際に現存している場合は直観によって意味が充実されるといえる¹⁹。

これに対して、中井における意味の拡張と意味の充実とは何であったか。第一に、彼にとって「意味充足」（意味充実）は「無限に自分に向かって問わんとする方向」に結びついていた。他

方、「意味の拡張方向」は、「意味充足」（意味充実）の概念を「無限に他人に向かって問わんとする方向」に転換する用語であったと思われる。意味の拡張方向は孤独な心的生活ではなく、他者とのコミュニケーションに関わる用語であったが、この言葉が意味充足概念の限界を継承したのか検討する余地はある²⁰。第二に、中井は、自らに語る内なる言葉や思惟の領域における作用としての意味の充足作用を語った。しかし、自己と内なる聴取者の関係が畏れを伴うものと見なされていることに、私たちは刮目しなければならない。

二・六 畏るべき存在としての内なる聴取者

「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」で、中井は、発言者、「内面なる聴取者」と「外面なる聴取者」を想定していた。特に、発言者と「自我の内面なる聴取者」の関係を考えて場合、一見、それは外的なものに媒介されない直接的な関係のように思われる。にもかかわらず、中井において、その関係は調和的なものと見做されてはいない。「自我の内面なる聴取者」という術語は、自分が語るのを聞くという事態に対応すると思われるが、中井の場合、内なる聴取者は、「畏るべき存在」とされているのである。「内なる言葉としての確信の最も深き内底に畏るべき存在として、分離されたる自我、すなわち『自分』が涯なき無関心性をもって黙しているのではあるまいか、という悪寒に似たる疑いを惹起せしめるものがある……」（中井、一九八一〔全集1〕：二六五—二六六〔ルビ削除〕）。自己と内なる聴取者の直接的関係は、透明な意味伝達を可能にするものとして肯定されるのではなく、むしろ悲劇的なものとして描かれている。

さらに、引用部分の後半では、自我の外にもさらに永遠に聴く否定者がいると述べられている。この意味で、人は「二つの孤独」につきまといわれている。それは確信した内容や主張する事柄が、内なる聴取者、および外部の聴取者によって否定されるという、不安を伴う予期によって生じるものであろう。「二つの孤独」は、おそらく、コミュニケーションの不確実性に関連している。だが、それは相互作用の一方に注目した言葉である。発言者と聴取者が相互に転換する実際のコミュニケーションは、より重層化した孤独や不確実性によって成立しているのではないか。

意味の拡張方向を説明するにあたって、中井は、論理的な説明と比喩による説明を試みた。一方で、論理的説明は、概念の特徴を明示しているが、同時に、その概念の限界をも顕在化させたように思われる。他方、隠喩としてのラグビーに曖昧さという陥穽が伴っているのは疑い得ない。しかし、だからこそ、論理的説明では示せなかった事柄を — おそらくは彼の意図をこえて — 提示する豊穡な可能性を持っているのではないか。それは結晶なのであり、自らが埋め込まれた地底をかいま見せながら、切子面から多方向に光を反射させる。隠喩としてのラグビーに立ち帰る時であろう。

三 集団と身体運動

言語活動を論じる際、中井はラグビーの隠喩を用いた。なぜ彼はそうしたのであろうか。この問いは二つに分割できる。第一は、なぜ、彼は隠喩を用いたのかという問いである。意味の量的展開を説明する方法として、それ自体が多様な意味を産出する隠喩を用いること。それは記述上の戦略として不自然ではない。第二に、なぜ、彼はラグビーの隠喩を用いたのか。意味の拡張方向に関する論考で、中井はラグビーそれ自体を説明していない。だが、それを発表した一九三〇年、中井は一連のスポーツ論を執筆・公表し、ラグビーを論じている。もちろん、スポーツ論と隠喩としてのラグビーは、別個のものである。だが、同時に、後に書かれたスポーツ論を補助線としてラグビーの隠喩を再考する時、いかなる理論が紡ぎ出されうるかということが探究されて

も良いであろう。もっとも、中井のスポーツ論²¹を扱う前に、その理論的前提である機能（関数）概念を確認することにしよう。

三・一 関係論的思考

一九三〇年の論文「機能概念の美學への寄與」で、中井は、事物を関係項として把握する関数（機能）概念を導入している。それは、今日、私たちが関係論的思考と呼ぶものに対応する²²。機能概念において、事物はもはや関係以前の独立した存在ではなく、「機能的関係によつてのみその全體の内容を得る」。「組織」の要素は全体の部分としての大きさではなく、「互いに規定し合ふ關聯的組織に融合する函数形」と見なされる（中井、一九三〇：四二一四三）。

機能概念に由来する関係論的思考は形而上学的区別の批判に通じるものでもあった。形而上学の罪は、認識論の領域を踏み越えた点にのみ存在しているわけではない。認識の領域内においても、「函数的關聯のもとにある分離すべからざる要素を、不當にも分離して考へ、論理的相關性にあるものを物的對象として扱ふ」ごとき誤謬を犯している（中井、一九三〇：四四）。ここでは、相互的にのみ規定される一對の観点を分離させ、論理的に相関するものを事物的に対立するものに解釈し直す形而上学特有の手續が批判されている。固定的で不動の境界を前提とする思考に対して提示されるのは、カッシーラーに由来する、可動の境界を前提とした思考である。「絶對的に變化的なものも、絶對的に恒常なるものも、理念として可想的であるにすぎぬ。只比較さるゝ他物によつて變化的とも恒常的とも云ひ得るのである。カッシーラーに取つては、現在の状態は過去のそれに対して客觀的と考へられると同時に、現在の状態は未來のそれに比して主觀的と考へられる」。これは対立するものに轉換可能性を見出す思考であり、中井はそれを「相對的なる轉換的ヒエラルカシア」と呼ぶ。

これに類似した思考が、意味充足と拡張に関する記述に見いだされる。「創作がさらにその完成とともに再び発表に転ずる時、すなわちこの芸術的充足性より再び芸術的拡張性に転ずる場合、それはさきの拡張層よりも深い層性による意味の拡張作用でなければならない。……かくして意味の充足と拡張のヒエラルケイヤはそのかぎりなき梯子を昇りゆく」（中井、一九八一〔全集1〕：二七四）。創作と発表との往還は、意味の充足と拡張の往還でもある。これらの過程は、単なる反復ではなく、充足作用と拡張作用の深化する過程である。

三・二 関係と集団

機能概念を契機として中井は関係論的思考を導入した。では、この思考において集団はいかに論じられたのか。「集団美」と題された草稿に以下のような記述がある。「集団の言葉の感じには、機能とその複合、すべてがその要素であり、その要素相互間の統制による『秩序としての多数』の意味がともなっている。どこかに中心体があるのではない。むしろ、固体が常に重々無尽に全体に浸み透っているところの一つの関連形態である」（中井、一九八一〔全集2〕：一八四〔ルビ削除〕）。ここで、集団は、単に実体としての個人が集まったものではなく、相互依存的な関連形態と見なされている。同じ文章の中に、ラグビーにおける「集団の組織と、その働きの美しさ」という記述がある。

動的な関係性、あるいは瞬間崩れゆく美しさ

中井は、ラグビーの美を、生き生きと描写した。「ホイッスルが鳴って、一齐にラグビーが動き始むるとき、球がそのいずれかの一人に落ちた瞬間、味方の十四人は勿論、敵の十五人の一々があたかも深い数学のごとく黙々とそのあるべきプレイの位置に動いているのを見入る時、球を中

心として、見えざる力の波紋が次から次へと二方向的に作用するのを見る。そして、得点はともあれ瞬間息もつかせざる関係の構成、一人のT・Bに渡すハーフの一擲は十四のラグーに呼懸ける『見えざる関係の構成』でなくてはならない。もし、『構成の感覚』が今新しき芸術の要素であるならば、……ラグビーは瞬間崩れゆく現の夢ではあれ、しかも常に永遠を背負わないと誰がいい得よう」(中井、一九八一〔全集1〕：四一〇～四一一)。ここで中井は、ボールをめぐるラグーたちの動きについて、「瞬間、息もつかせざる関係の構成」と記している。この感覚は彼にとって「新しき芸術の要素」であった。かつて言語活動の隠喩としてラグビーに言及した中井は、その後、スポーツとしてのラグビーを、「関係の構成」でありながら「瞬間崩れゆく美しさ」を喚起するものと見なしたのである²³。

共同存在的气氛

中井は、ラグビーを機能概念によってのみ把握したわけではない。ボートを例としてチームの共同相互存在を彼はこう説明する。「自分と云ふものは他のシートとの各々の特殊なる機能と部署に従つて、共同相互存在としてのみその存在の意義をもつのである。しかも、スポーツに於て浮上り来るものは〔……〕寧ろその相互の共同性そのものなのである」(中井、一九三三：九九)。ここで中井は、機能概念と存在論的タームを併用しているが²⁴、この後、ラグビーが言及される。「ラグーのハーフの一擲によつてTBの線は云はずもがな、十五のラグーが球を中心に見へざる力の波紋となつて、次から次に二方向的に作用する感じは、一つのチーム全體が一つの集團的實存的性格であることを思はしめる」(中井、一九三三：九九)。もっとも、この論考では、ラグビーのチームにおける集團的實存的性格が言語活動と関連づけられることはなく、従つてまた、集團的討議における気分も論じられてはいない。

逆関係の否定性

集團的實存的性格。この言葉を目にする時、我々は調和的な集團を想起するかもしれない。しかし、中井にとって、ある種のスポーツは調和的イメージで捉えるべきものではなかった。「ボート、ランニング、水泳その他フィールド競技の多くのものは競争において、単一的であるに反して、野球、蹴玉、のごときものは多くの要素の複合であると同時に、逆方向すなわち妨害行為を含んでいる意味で二方向的である。……前者においては比量に積極的否定性がないのに反して、後者は明らかに逆関係の否定性が包含されている」(中井、一九八一〔全集1〕：四二八)。この記述の後、中井はラグビーで「見えざる力の波紋が二方向的に作用する」ことに言及している。したがって、ラグビーもまた、「逆関係の否定性」を含むと考えられている。言語活動の隠喩としてのラグビーの記述には、「発言と聴取の両形態を二つの対立するチーム」と仮定する箇所があったことを考慮すれば、発言と聴取の関係は逆関係の否定性に対応すると思われる。逆関係の否定性としての二方向性という問題は、従来の中井研究において見過ごされてきた。関係としての集團という問題設定では統合的なイメージが想起されやすいのに対して、逆関係の否定性の契機は、その限界を内側から越え、葛藤について論じることを可能とする。対立するチームがあつてこそ、ボールをめぐるラグーたちの動きが生まれる。発言と聴取という逆関係の否定性は、言語活動において動態的關係を生み出す力の源泉である。

三・三 隠喩をめぐる

中井のスポーツ論における集團ないしチームに関する記述から、相互関連する動態的な組織、共同存在的气氛、逆関係の否定性などの論点を抽出してきた。これらは、スポーツ論で展開され

た論点であり、言語活動の隠喩として中井がラグビーに言及した後に発表されたテキストに含まれている。スポーツとしてのラグビーを論じる際、中井は、言語活動の隠喩としてのラグビーを意識していたのであろうか。それとも、両者は全く切り離された企てであったのか。しかし、これは回答しえぬ問いである。外在的に意図の詮索をするのではなく、ここでは問いを転換したい。中井のスポーツ論を言語活動の隠喩としてのラグビーに接木することで、いかなるコミュニケーションのイメージが描き出されるのか、と。

かつてソシュールがチェスの譬えを用いたことは知られている。これに対して、中井におけるラグビーの隠喩は、言語活動と身体、行為の密接な関係を強調している。それは、さらに、ゲームとしての言語活動というイメージを喚起する（しかし、中井には規則に関する議論が欠如している）。それはまた、極めて動的で、アゴニスティックな言語活動のイメージを提示している。ラグビーボールは「常にゴールを志向する」と述べられているが、実際には、常に成功するわけではない。言語活動の隠喩としてのラグビーは、ミスや不成功の問題を含むと思われる（これは疎隔の問題に関連すると思われる）。

四 おわりに

一九二〇年代後半から一九三〇年にいたる時期において、中井は言語活動をめぐる議論を集中的に展開した。それらはやがて論文「委員会の論理」に組み込まれることになる。ところが、「委員会の論理」で意味の量的方向が論じられる際、隠喩としてのラグビーは用いられていない。一九三〇年における意味の拡張方向をめぐる論考を最後として、中井における隠喩としてのラグビーは姿を消してしまったのである。

一九四八年、中井は死歿した戸坂潤にかんする学生時代の思い出を発表している。「彼が京都を去るまで、私と彼は、実に会えば必ず闘う論敵であった。土曜日毎、田辺元先生の訪問日は、きまって頬の熱するまでのポレミイクに終わっていた。……『あっ』と云うような、新たな論旨から、こちらの立場を崩さんとして、実に精緻で、堂々とした論理をもって臨んで来るのであった。／大きなワナを仕組んで、論理のすべてが、それに導くように、相手にハッキリと、その誤謬を自分でみとめるために、彼の論争のメカニズムが構成されている。それをこちらで感じつつ、その中に突込「ママ」んでゆく論争は、実にたくましい格闘であり、実に健康な、すがすがしいスポーツであった」（中井、一九七六：九七-九八）。

この文章は、一見、回顧的エッセイにすぎないように思われる。しかし、注意深い読者は、言語活動論で用いられた「論争」のカテゴリーが、そして隠喩としてのスポーツが、二〇年近い歳月をこえて回帰していることに気がつくであろう。相手の承認を要求する「論争」は、理論や体系的な知を必要とする、意識的な言語活動のはずである。それが、スポーツという、直接的＝無媒介的な身体運動にたとえられている。言語とスポーツにはどのような関連があるというのか。この問いを体系と実践との関係に置き換えて考えてみたい。

体系はその中から実践を生み出すことはできない。というのも、仮に体系が実践を包含するなら、実践はもはや実践ではなくなり、観想された実践の概念にとどまるからである。これに対して、体系それ自体が実践に媒介される可能性が考えられる。「論理そのものが、行動を離れては成立しない」（中井、一九四七、三六）。意識によって媒介された理論、あるいは意識に媒介されない直接性のいずれでもなく、行為によって媒介される論理への関心を、この言葉は示している。言語活動や論争という、意識に媒介された活動の隠喩としてスポーツが用いられたのは、行為に

媒介された知のあり方を示すためであったと思われる。見てきたように、中井は戦前から言語活動や意味に関する論考を発表し、そのなかで言語活動をラグビーという身体運動に譬えていた。戦前のテキストにみられる隠喩としてのラグビーは、論理と行動の結びつきを重視する思考に対応する。おそらくそれは、意味と反意味という対立をこえて、中井の思想を捉える糸口になるであろう。

注

- 1 近年では、転向論の文脈による研究がある。
- 2 コミュニケーション論的視点からなされた中井研究の重要なものは下記で論じた（門部，一九九八）。
- 3 メディアによる知覚の規定という問題が主体と対象の関係に対応するのだとすれば、コミュニケーションは主体と主体の関係に関わる。しかも、主体間のコミュニケーションはメディアによって媒介され、メディアによる主体の認識の規定はコミュニケーションにおいて生起する。従って、メディアとコミュニケーションは絡み合いの関係にある。本稿では、中井におけるコミュニケーション論的側面に注目している。
- 4 なお、これらの論考は、その後、下記の著作に収録される（後藤嘉宏，二〇〇五；北田，二〇〇四）なお、北田論文は著作に収録されるにあたり、副題が変更された（「中井正一の『媒介』概念をめぐって」）。本稿で言及したのは著作に収録された論考である。
- 5 門部昌志「中井正一における相互転換の論理：『機能概念の美学への寄与』を中心として」（日本マス・コミュニケーション学会二〇〇〇年度春期研究発表会 於：関西大学）
- 6 本稿は拙稿の第一章を改稿し、大幅に加筆したものである（門部，二〇〇四）。
- 7 なお、S. H. ブチャー（一九四〇：一七七）も参照のこと。この改訂版『ギリシア精神の様相』の場合、中井の文章における「ロゴスの使用」に対応する箇所は単に「ロゴスの役立ち」と表記されている。
- 8 なお、ハヴロックの議論には批判もある（Melberg, 1995）。
- 9 中井の解釈によれば、判断には「判断的是認」、また判断的是認の是認としての「同意的是認」がある。前者は、確信の領域に、後者は主張の領域に対応する。
- 10 ライナッハも二つの確信に気づいていたが、その「厳密なる区別と、その過程については触れることをしなかった」（中井正一，一九八一〔全集1〕：二六〇）。
- 11 両論文とも、一九三〇年、異なる雑誌の二月号に掲載された（中井正一全集における「機械美の構造」の刊行年は誤りである）。
- 12 論文「同化と異化」で佐藤は、慣れ親しんだものに驚くこと、異邦人の目をやしなうことを「異化」とし、送り手の意図した「異化」が受け手にとっての「異化」と必ずしも一対一対応しないことに注目する。「受け手の『異化』が表現者＝送り手の『異化』を乗り越え」る可能性に着目することにより、彼は「異化」論を受け手の側から再考した。異化論を受け手論に転換させるための手がかりが意味の拡張と疎隔に関する中井の議論であった。これに対比されるのは一九三四年に刊行された、G・H・ミードの『精神・自我・社会』における議論である。主我については言及することなく、一般化された他者を客我として内面化させることで新たなパースペクティブを獲得するという議論を佐藤は同化論と見なし、異化論の系列に対比させている。
- 13 竹内（一九七七）では、中井における他人は心を許せる相手ではなく「否定性」をもった

- 「他人」 — 永遠に聴く否定者 — であることが強調されている。
- 14 私見では、この指摘は「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」で中井が明示的に語っていない事柄であり、論考に含まれた論点を創造的に展開したものと思われる。
 - 15 他人を納得させるという目的は発語媒介的な言語活動の特徴である。
 - 16 Hall (1980) の議論を想定した記述である。なお、ホール以降のオーディエンス論については下記を参照 (Morley, 1992, 1994)
 - 17 論理的命題が感覚的意味をもつ場合、あるいは芸術作品に概念的意味が込められている場合も考えられよう。
 - 18 「時代時代によって言語構造は多くの異なる隔離要素をもっていたことを指摘して、時代の文学の変様をあたかもその爆発の年代をその截断面に見出す地質学のごとく、検索しうることとなるであろう。」(中井, 一九八一〔全集3〕: 二六六)。
 - 19 フッサールの『論理学研究』を参照。
 - 20 『声と現象』の中でデリダは、充実した根源的直観に対する意味の現前が現象学における価値の源泉となっていること、さらに、意識としての現前の特権は声の卓越性に基づくことを指摘した。中井は「内なる聴取者」について述べたが、意味伝達の透明な媒体として声の特権化し、文字を貶めたわけではない。なお、デリダの議論は、自己現前の純粋な実現と自由な戯れとの間で「オール・オア・ナッシング」の選択をするものではない。
 - 21 中井のスポーツ論については、以下の研究がある (樋口, 一九八七; 井上, 二〇〇〇; 亀山, 一九九三)。
 - 22 中井の機能概念については門部 (一九九九) でも論じた。
 - 23 ラガーの動きを「関係の構成」と見做した「スポーツの美的要素」は一九三〇年の五月から六月にかけて『京都帝国大学新聞』に発表された。隠喩としてラグビーが用いられたのは、同年二月号の『哲学研究』に掲載された「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」においてである。
 - 24 「ノイエ・ザッハリッヒカイトの美学」(一九三二年)で中井は、カッシーラーとハイデガーを架橋している。

引用・参考文献

- 稲葉三千男, 一九八七, 『マスコミの総合理論』創風社。
- 井上俊, 二〇〇〇, 「文化としてのスポーツ」『スポーツと芸術の社会学』世界思想社。
- 亀山佳明, 一九九三, 「スポーツと日常生活にみる滑走感覚」, 井上俊編『現代文化を学ぶ人のために』世界思想社。
- 北田暁大, 二〇〇〇, 「《意味》への抗い—中井正一の映画=メディア論をめぐる—」『マス・コミュニケーション研究』第五六号。
- , 二〇〇四, 『<意味>への抗い—メディアエーションの文化政治学』せりか書房。
- 後藤和彦, 一九七三, 「コミュニケーション史の研究史」『講座コミュニケーション2』研究社。
- 後藤嘉宏, 二〇〇〇, 「中井正一とコミュニケーションの双方向性」『マス・コミュニケーション研究』第五七号。
- , 二〇〇五, 『中井正一のメディア論』学文社。
- 佐藤晋一, 一九九六, 『中井正一・「教育」の論理学』近代文芸社。
- 佐藤毅, 一九七三, 「同化と異化」『講座・コミュニケーション6』研究社。
- 杉山光信, 一九七五, 「中井正一試論—その言語・映画の理論と弁証法の問題について—」『東京

大学新聞研究所紀要』第二三号。

竹内成明，一九七七，「『意味の拡張方向』についてのノート」『評論社会科学』第一二号。

鶴見俊輔，一九六二，「戦後からの評価」，久野収編『美と集団の論理』中央公論社。

———，一九七三，「コミュニケーション史へのおぼえがき」，『講座コミュニケーション2』研究社。

中井浩，一九七四，『コミュニケーションの構造』ダイヤモンド社。

中井正一，一九三〇，「機能概念の美学への寄與」『哲學研究』第一七六号（十一月号）。

———，一九三三，「スポーツ氣分の構造」『思想』第一三二号（五月号）。

———，一九三六，「委員會の論理（上～下） — 一つの草稿として — 」『世界文化』第一三～一五号（一～三月号）。

———，一九四七，「藝術に於ける媒介の問題」『思想』第二七五号（二月号）。

———，一九七六，「戸坂君の追憶」，田辺元他著『回想の戸坂潤』勁草書房。

———，一九八一，『中井正一全集1』美術出版社。

———，一九八一，『中井正一全集2』美術出版社。

———，一九八一，『中井正一全集3』美術出版社。

———，一九八一，『中井正一全集4』美術出版社。

針生一郎，一九七三，「中井正一のコミュニケーション論」，『講座コミュニケーション1』研究社。

樋口聡，一九八七，『スポーツの美学—スポーツの美の哲学的探究—』不味堂出版。

門部昌志，一九九八，「中井正一研究とメディア社会学の視点」『社会関係研究』第四卷第二号。

———，一九九九，「技術と媒介の社会学」『年報人間科学』大阪大学人間科学部，第二〇号。

———，二〇〇四，「中井正一における集団的コミュニケーションの観念」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第五号。

山田宗睦，一九七三，『コミュニケーションの文明』田畑書房。

欧語文献

Auroux, S., et al., 2004, *La philosophie du langage*, PUF.

Austin, J.L., 1962, 1975, *How to do things with words*, Oxford university press. (=一九七八, 坂本百大訳『言語と行為』大修館書店)

Bougnoux, D., 1993, *Sciences de l'information et de la communication*, Larousse.

———, 1998, *La communication par la bande*, La Découverte.

———, 1998, *Introduction aux sciences de la communication*, La Découverte.

Butcher, S.H., 1904, *Some aspects of the greek genius* (=一九四〇, 田中秀央・和辻哲郎・壽岳文章訳『ギリシア精神の様相』岩波書店。

Debray R., 1991, *Cours de médiologie générale*, Gallimard.

Derrida, J., 1967, *De la grammatologie*, Minuit (=一九七二, 足立和浩訳『根源の彼方に グラマトロジーについて』現代思潮社)

———, 1967, *La voix et le phénomène*, PUF. (=一九七〇, 高橋允昭訳『声と現象 フッサール現象学における記号の問題への序論』理想社)

Havelock, E. A., 1963, *Preface to plato*, Harvard university press.

Husserl, E., 1922, *Logische untersuchungen* (=一九七六, 立松弘孝訳『論理学研究4』みすず

書房)

Luhmann, N., 1984, *Soziale systeme* (=一九九三, 佐藤勉監訳『社会システム理論』恒星社厚生閣)

Mead, G. H., 1934, *Mind, self and society* (=一九九五, 河村望訳『精神・自我・社会』人間の科学社) (Melberg, A., 1995, *Theories of mimesis*, Cambridge university press.)

Morley, D., 1992, *Television, audiences & cultural studies*, Routledge.

——, 1994, “Active audience theory: Pendulums and pitfalls”, in Mark R. Levy and M. Gurevitch(eds), *Defining media studies : Reflections on the future of the field*, Oxford university press, pp.255-261.